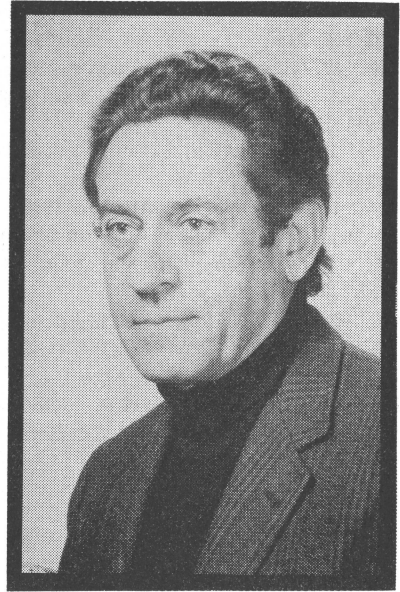


## 故 Jule Gregory Charney の御逝去を悼む

1981年6月17日、Jule Gregory Charney が亡くなった。まだ64才だった。ことに、その老いのたるみを見せない精悍な容貌、ようやく白さを加えたかという黒い髪、眼鏡なしで電話帳を読む鋭い眼、そして2年前ウッズホール海洋研究所の夏、背中のリックに資料をつめこんで海が光る松並木の道を元気に自転車を走らせていた彼の姿から、誰が想像しただろうか。それから僅か2か月後にはがんの手術をうけなければならなくなったことを。そして、はじしい化学療法に耐えつつ、不屈の精神で励んだ研究生活も1年半で終らなければならなかったことを。

彼の経歴は簡単である。1917年1月1日サンフランシスコでロシア移民の子として生れた。幼時の生活は豊かでなく、第2次世界大戦よりもアメリカの大不況の方が自分の精神形成に大きな影響を及ぼしたとは、彼自身が語っていたことである。1938年数学と物理専攻の学士、1940年数学修士、1946年気象学博士（いずれも UCLA から）。この年数はアメリカのとびきり秀才というものではない。しかしこの期間に手がけた2つの論文、傾圧不安定波の力学（1947）と大規模な大気運動のスケール・アナリシス（1948）は、後に一気に開花させた数値予報の基礎となるべき古典的名作となった。その後2年ほどオスロー大学、ロスビーのいたシカゴ大学に滞在した後、1948年から56年までプリンストン大学高級研究所にて、von Neumann などと数値予報を開拓発展させる。1956年からは、ずっと MIT 気象学教授（うち3カ年は教室主任）であった。

戦後の気象力学のすばらしい発展を顧みるとき、それが彼を中心として動いていったと云っても過言ではないだろう。その主な業績だけをたどっていけば、上記の2論文に続いて、傾圧大気の数値予報（1949—1951）、傾圧大気の数値予報（1953）、プリミティブ方程式系による数値予報（1955）、慣性境界層としてのメキシコ湾流（1955）、準地衡風大気大循環予報（1956）、大規模運動 エネルギーの上方伝播（1961）、内部傾圧ジェット気流の不安定性（1962）、第2種条件不安定性 CISK と台風発達論（1964）、赤道潜流理論（1951, 1971）、地衡風乱流（1971）、砂漠と早ばつの力学（1975—1977）、定常流の多様性とブ



ロッキング（1979）など、数値予報の開拓者という、それだけでも気象学史に不滅の名を残す業績に加えて、上記の研究は、break through という言葉が正に適切な、新しい概念と見かたの導入、それを突破口として、新しい研究領域が広げられるという画期的なものであった。この業績に対し、アメリカ気象学会から3度受賞した他、American Geophysical Union, Smithsonian Institute, WMO, Royal Meteorological Society などから、多くの賞や名誉をうけた。また1964年には、もうアメリカ国立学士院の会員に選ばれている。

彼はまた不思議な魅力をもつ人物であった。彼の人脉の深さには、いつも驚かされていた。外国人研究者がアメリカ永住のヴィザをとるために万策つきた最後のより所は、彼に頼むことだという通説もあった。その学問的な見通しのよさと人脉が高度に発揮されたのが GARP であったろう。よく知られている様に、1961年、ケネディ大統領が宇宙空間平和利用の国際利用を国連で提唱し決議採択されたが、これは当時 MIT 学長で大統領科学顧問官だった Jerome Wiesner の助言によるとされている。

（670 頁に続く）

にその発生を予測することができる。特別観測が行なわれれば、本文で議論しなかったオープン・セルも隣接して発生することが多いので、セル状の雲についてより総合的な資料が取得されよう。

#### 文 献

Priestly, C. H. B., 1962: The width-height ratio of large convection cells, *Tellus*, 14, 123-124.

Rosmond, T. E., 1973: Mesoscale Cellular Convection, *J. of the Atm. Sci.*, 30, 1392-1409.

Sasaki, Y., 1970: Influences of Thermal Boundary layer on Atmospheric Cellular Convection, *J. of the Met. Soc. of Japan*, 48, 492-501.

Sheu Pi-Jaw, E. M. Agee and J. J. Tribbia, 1980: A Numerical Study of Physical Processes Affecting Convective Cellular Geometry, *J. of the Met. Soc. of Japan*, 58, 489-499.

(666 頁より続く)

そして Charney が中心となってまとめあげ、アメリカの学士院からのレポートとして出版されたのが “The feasibility of a global observation and analysis experiment” (1966) であった。これは気象界では Charney の “福音書” とよばれ、国際学術会議 (ICSU) と世界気象機関 (WMO) の協力事業として GARP が生れた。政府間機関である WMO と、非政府機関である ICSU が共同事業を行ったのは、これが始めてであって、その実現には彼のカリスマ的存在が大きな役割を占めていたことは間違いないであろう。

私が東大海洋研究所に移る前の 6 カ年あまりと、再び 1975 年のサバティカルの 1 カ年を彼と共に過したのも、彼とそれを取りまく雰囲気にかかれたからであった。飲むのが好きで、女が好きで、絵画も好きだった。

私が壁にかける絵画を買わねばといえ、すぐボストンの画廊を紹介してくれた。彼の誕生日に彼のワイフが油絵をプレゼントしたほどだった。もっともその絵はものすごくアブストラクトで、絵のどっちを上にしてかけるべきかワイフと 2 人で大議論になってしまったけれど、彼ほど、どこへでも気ばらず堂々と自然にふるまえた人を知らない。その反面学生相手でも、その話が彼の学問的好奇心を満足する限りは、何か他のことで妨害されるまで何時間でも話し耽っていた。それがただただ好きなのである。その代り話が trivial なことになると、いかにも退屈そうな顔をして、やがて低く口笛をハミングしだすので退散せざるを得ないのであった。その彼もすでにいない。淋しい限りである。

(小倉義光)